

Ⅲ 心理的減音効果

1. 本研究の目的

都市の過密化や騒音、特に自動車騒音などによる都市環境の悪化が進行している今日、横浜市をはじめとした各都市で都市の環境改善が強く要請されている。こうした中で、植栽即ち緑がもたらす景観上の効果は勿論であるが、心理的に都市の喧騒感を緩和する効果（これを「緑の心理的減音効果」と呼ぶ）についても期待されている。

人々は緑に対して一般に良いイメージを持っている。例えば、春の新緑は新鮮で活気にあふれ、夏は涼を求めて木陰に集い、安らぎのある、好ましい、美しい等様々なイメージが浮かぶが、どれをとっても良いイメージである。最近では森林浴という言葉も生まれるほど緑が見直され重要視されている。これが宅地造成、工場誘致等による開発を進めてきた結果による自然破壊の見直しとして生じてきたことは皮肉なものである。

ところで、人々が漠然と抱いている緑に対する良いイメージの原因は何なのであろうか。

まず、記憶や経験として持っている緑と自然との結び付きである。過去経験によって積み重ねられた出来事や概念は相互に結合されている。想起するということは幾つかの規則を系統的に適用し、この貯えられた情報を分析することである。もし「緑」という情報が与えられた場合、過去において「緑」を見た時の沢山の情報を分析するであろう。その中には「山」や「田舎」などと結び付けた情報があるかもしれないが、いずれにせよ都市の喧騒感を離れた自然との結び付きが深いと考えられる。そして、緑が「美しい」「静かな」などの属性を伴って記憶されているならば、同時にそれらを想起するはずである。

次に、緑色への好意が¹⁾挙げられる。日本人の嗜好色の調査から総合的に青が最も好まれ、白・赤・緑と続く。色相別に見ると、色相青が圧倒的に好まれる。また、赤・黄・緑などの基本色相が好まれ、中間色相は好まれ

にくい。トーン別に見ると、ビビッドトーンつまり純色、次いでライトトーン・ディープトーンが好まれる。つまり高彩度の色が好まれ易い。すなわち、青・白・緑などは好まれ易く嫌われにくい。しかし、勿論これらの結果には性差・年齢差・地域差等の集団差または個人差がある。例えば緑化率の高い地域の方が緑を好み易いことを示唆するデータもある。この色彩嗜好は普遍的な側面として人間の生物学的あるいは生理的な条件に強く規定される「快-不快」の法則に基づいていると考えられる。他方、集団差をもたらす要因としては、生得的なものも含まれるが、後天的な要因つまり環境や学習の要因が大きな役割を果たしている。こうした中で、緑という色は日本人に好まれ易く嫌われにくい。

更に、緑化運動などが持つ社会的規範への同調²⁾が挙げられる。我が国では最近特に緑化運動が盛んであり、緑を社会的に良いものとしてとらえている。このことに人は同調し、緑に対して「好ましい」「美しい」などの良いイメージを持つ。

人々が都市のイメージを形成する際には、主に都市景観などの目から入る情報を知覚する視覚と騒音などの耳から入る情報を知覚する聴覚の2つの感覚が大きく寄与している。現実の場面において、都市の与えるイメージは視覚情報のみや聴覚情報のみによってそれぞれ独立して形成されるものではなく、両情報の交互作用によって形成されるものであると考えられる。そしてこれらの形成には体制化、注意、記憶などの人間の複雑な認知システム³⁾が働いている。

本研究は上記の問題点を考慮しつつ緑の心理的減音効果のメカニズムを実験的に明らかにし、今日の都市の環境改善に関する課題に応じることを目的としている。